

晏嬰

晏嬰（あんえい）は「社稷（しゃしよく）の臣」である。「社」は土地の神、「稷」は五穀の神のことで、どちらも国家にとって重要な守り神ということから、「社稷」は国家や朝廷という意味である。

「社稷」がいわば農業神の祭祀と考えると、古代においては事実上天下国家であるとか民の生活であるとかに当たるのではないかと思う。

つまり「社稷の臣」とは、「天下の民を優先して考える臣」であり、それはそもそもの由来からして「君主よりも天下万民を優先する臣」という意味合いを含んでいるというこららしい。

しかしながら、実は、それと矛盾するような解釈もまた存在していたらしい。

前漢文帝の時、呂後の一族を排除する上で重要な働きをした周勃は文帝からも極めて鄭重な扱いを受けていたが、袁盎なる人物はそれに対してこう進言した。

『 丞相周勃は「功臣」ではあっても「社稷の臣」ではございません。「社稷の臣」というのは主君と共にあり、主君が滅べば共に滅びるような存在です。呂後の時代、劉氏の天下が危うくなりながらもそれを正すことが出来なでいた周勃は「社稷の臣」ではないのです。そんな者に対して謙譲するというのはよろしくありません』

袁盎によれば「社稷の臣」とは主君と共に生き主君と共に死するような者であるらしい。

晏嬰の場合は、[両頭截断](#)されていて、国民第一であると同時に主君第一であったようだ。国民第一とか主君第一とかのこだわりはなかったようだ。国民の生活が潤っていなければ、それは自分の責任だ、と言っている。つまり、君主が悪ければ、それは自分の責任だ、と考えているのだ。何事も人のせいにはしない生き方というのは素晴らしい。

晏嬰は、中国春秋時代の政治家である。晏子とも尊称される。

齊に仕え、景公の代では宰相としてその隆盛を担った。社稷の臣であることを第一とし、誰に憚ることなく諫言を行なった。その私心のない姿は齊の民衆から絶大な人気を誇ったとされる。史記において司馬遷は「晏子の御者になりたい」とまで語り、孔子は「晏平

仲、善く人と交わる。久しうして人これを敬す（晏平仲の人との交わり方は素晴らしい。交友した人々は皆、いつのまにか晏嬰を敬し親しむようになる）」と評している。

主君・景公は心から晏嬰を尊敬し、晏嬰は心から景公を愛した。晏嬰が危篤に陥ったのを知らされた時の景公の取り乱したエピソードは、すでに紹介してあるが、このような事例は中国の歴史上あったであろうか。それほど晏嬰という人物は偉大な人物である。それでは以下において、いくつかの注目すべきエピソードを紹介しておきたい。

（1）景公の場合

- ① 景公が晏子の功績に報いて領地を与えようとした。晏子は「国はそれほど大とはならず、民の生活も潤っているとは言えません。これは宰相たる私の不徳の致すところです。そのような私が受け取ることはできません」と断った。景公はそれでも許さずに領地を与えたが、晏子は他日に折をみて領地を返上した。
- ② 景公の愛娘は晏子に嫁ぎたいと願っていた。ある時、景公が酒宴中に晏子の妻を見て「ずいぶん老けてしまっておる。わしの娘は若くて器量が好い。どうだ貰わないか」と聞いた。すると晏子は「今は老けましたが、若くて器量の好い頃もあつたのです。人間は最初にこういう風になる後々のことまで約束いたします。わたしも一度約束した以上はそむくわけにはまいりません」と断った。
- ③ ある時、景公が晏子に「お前の望むことは何かあるか」と聞いた。晏子は「臣として畏敬され、妻からは頼られ、後を心配なく嗣がせられる子が欲しいものです」と答えた。景公が「もっと願いはないか」と問うと「明君と賢妻に加えて衣食足りて良き友があれば好いですな」と答えた。景公が満足して去ろうとすると、更に晏子はこう述べた。「一番の願いは、世話のかかる君に、家から追い出したくなるような妻、そして不肖の子が居ることです」と。この答えに景公は大いに満足したという。
- ④ ある寒い日、景公が晏子に「温かい食べ物を持ってきてはくれないか」と言うと、晏子は「臣の役目ではございません」と断った。景公が「衣服を持ってきてはくれまいか」と頼んでも、晏子は「臣の役目ではございません」と断った。景公が「それではお前は何の臣なのか」と聞くと、晏子は「私は社稷の臣です。国家を立ててその根本を明らかにし民を安んずることが役目です」と答えた。
- ⑤ 景公は孔子の進言に心を動かし、大臣級の処遇を与えて召し抱えようとした。それを晏嬰は咎めた。「儒者は傲慢で、しかも独善である。」

註：景公の治める国に儒教をかぶせたらどうなるか。「予想するまでもない。どうにもならぬ国になる。」・・・というのが晏嬰の実感である。「それはならぬ、あれはならぬ」という禁止事項が並んでいる儒教と付き合っただけでゆけるはずがない。儒教では、庭を歩く時

は小走りにするようにし、堂にのぼる階段は一步をあげて他の足をそろえてから、また一步を上げる。また堂上では小走りするような歩き方をしてはいけない。それだけとつても、とても景公は守れそうにない。君主が守れないような礼儀を、人臣に押し付ける愚を晏嬰は避けようとしたのである。君主が守れないような礼儀を、人臣に押し付ける愚については、次のようなエピソードがある。

(2) 景公の先代霊公の場合

齊の霊公は男装を好み宮廷内の女性に男装をさせていた。するとこれが国内の民衆にまで広まってしまった。霊公は之を禁じて御触れを出した。女子にして男子の飾りをする者は、その衣を裂きその帯を断つ、と。実際に衣を裂かれ帯を断たれる者が続出したがそれでも止むことがなかった。

そこに晏子が謁見した。困っていた霊公は晏子に問う。
我は官吏に女子にして男子の飾りをするを禁ずる御触れを出させた。そして実際に違反した者の衣帯を裂断した。それにも関わらず、一向に止むことがないのはどういうわけだろうか、と。

晏子が答えて云う。

君は内では之を許し、外では之を禁じています。例えるならば、「牛首を門に懸けて馬肉を売っているようなものです。」なぜ内に男装を禁じないのでしょうか。そうでなければ外に禁ずるなどはできません、と。霊公は善し、と言って宮廷内の男装も禁止した。すると一ヶ月にして国内に男装する者はいなくなったという。

註：「牛首を懸けて馬肉を売る」という晏嬰の故事は、「羊頭狗肉」の語源とされる。

(3) 景公の先代荘公の場合

① 荘公は晏嬰にこのような下問を発した。「当世を威（おど）して添加を復するは、時か？」と言った。今の世に武威をふるって天下を征服するにしても、時に恵まれなければ、できないことなのか、と聞いたのである。それに対して晏嬰は、「行です」と答えた。

「何を行うのか」走行は晏嬰の意見を聞くゆとりを持っていた。晏嬰はそれに対して次のように言う。

「走行が天下を復する道を歩みたいのなら、方法は武威だけではない。むしろ武力を念頭から外して、齊の国民を愛することから始める、次に、国民と臣下が必死の努力をすることを尊重する。さらに、裁判を公平に行い、賢臣を抜擢して国政に当たらせるようににする。他国の君主は武力を恐れるより、その方が怖いのであるから、齊の善政こそ初稿を威することになる。常に人おを思いやり、人の道を踏み外さないようなところにいれば、それがそのまま天下を服する道になる。」晏嬰は身じろぎもせず言った。

② 夜、莊公は楽人に歌を歌わせながら酒を飲み、ふと彼は側近に酔眼を向け、「晏嬰をここに呼んで来い」と命じた。座興に晏嬰をからかってやろうと思ったのである。そして晏嬰が来ると、莊公があらかじめ楽人に耳打ちしておいた歌を楽人が歌った。「己（や）めんかな、己（や）めんかな、寡人（かじん）説（よろこ）ぶこと能（あた）わざるなり、爾（なんじ）何ぞ来（きた）るや」

それに対して、晏嬰は、「己（や）めんかな、己（や）めんかな、国人選ぶこと能（あた）わざるなり、爾（なんじ）何ぞ在るや」と歌った。莊公に君主の座から去ったらどうかと勧める歌である。そう言い残して、晏嬰は故郷夷維に帰ってしまう。

註：酒の席での戯言がもとで晏嬰をなくした莊公は、程なく崔杼（さいちよ）の反乱によって殺されてしまう。晏嬰を失わなければ、崔杼（さいちよ）の反乱は成功しなかったかもしれない。晏嬰は故郷夷維は、現在の淄博市と青島市の中間ぐらいのところにあって、晏嬰はそこでしばらく百姓みたいな生活をするのである。しかし、齊の国は、「社稷の臣」晏嬰を必要としていた。晏嬰は、夷維で崔杼（さいちよ）の動きを聞くや直ちに崔杼（さいちよ）の邸宅に赴くが、それは莊公の殺戮された直後であった。まだ、地面に仰臥している莊公の屍体に近寄り、晏嬰は、ふと、眼差しを和らげ、さらに悲しみ色で染めた。晏嬰は膝をついた。その膝をじりじり進めながら、莊公に手を差し伸べ、頭を抱えると、自分の股（もも）の上においた。優しい手つきであった。やがて泣き、また哭いた。泣哭（きゅうこく）を終えると、股（もも）の枕をはずし、三度跳（おど）り上がった。それを三踊（さんよう）という。もっとも深い哀しみを表す礼（れい）である。身の置き場もない哀しみを表現するのであろうか。